

〔教育実践研究〕

成熟期看護学実習における学生受け持ち患者特性からみた教育上の課題

—一般病院での実習—

奥村 美奈子¹⁾ 古川 直美¹⁾ 古田 さゆり²⁾
岩崎 佳世¹⁾ 坪井 桂子¹⁾ 小野 幸子²⁾

Educational Subject on Nursing Practice for Adults in Hospital:
Analysis of Patient's Character

Minako Okumura¹⁾, Naomi Furukawa¹⁾, Sayuri Furuta²⁾,
Kayo Iwasaki¹⁾, Keiko Tsuboi¹⁾, and Sachiko Ono²⁾

I. はじめに

平成14年度から開始した成熟期看護学実習は平成18年度で5回目となる。臨地実習は事業所等の労働の場、一般病院、高齢者ケア施設で行われ、学生は実習要項に示されている具体的目標1「成熟期にある人とその家族の生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶ」と5つの健康課題別目標を指針に、一般病院、高齢者ケア施設で各々1名のケア対象者を受け持ち実習を行なっている。成熟期看護学実習の方法は以下の「II. 成熟期看護学実習概要」で示すように2回の改変を行ってきたが、事業所等の労働の場、一般病院、高齢者ケア施設で実習を行うという基本スタイルは継続している。特に一般病院での2週間は、内科系・外科系病棟のどちらか1ヶ所のみでの実習となっており、この2週間の中に「特殊な環境下での看護」として手術室実習1日、「社会生活を営みながら外来診療を利用している人とその家族への看護」として透析室または外来での実習を1日課している。このように学生の実習体験が限られる現状を踏まえ、実習最終週の「実践と理論の統合 2-2」においてグループワークと発表を行い、学生間の体験と学びの共有を図って来た。

一方、学生個々の限られた実習体験を基に、成熟期という幅広いライフサイクルにある人々の健康課題と看護

の学びを効果的に共有するためには、各学生が受け持つケア対象者の特性に偏りがなく、可能な限り多様であることが望ましいと考える。しかしながら、平成12年度に開校した本学は、県内における看護職養成機関としての歴史が浅く、実習病棟の確保という点で制約がある。そのため実習を担当する教員は、実習施設の条件を考慮しつつ、個々の学生の学びに加えて「実践と理論の統合」を通じて学生全体の成熟期にある人々の健康課題と看護の理解が深まることにも留意しながら受け持ち対象者の選定を行う必要がある。

そこで本研究は、一般病院において学生が受け持ったケア対象者の特性という視点から現状を明らかにするとともに、成熟期看護学実習における学生の学びの充実に向けて、学生の受け持ち対象者を選定する上での方向性や臨地実習終了後の「実践と理論の統合」の在り方について検討することを目的とする。

II. 成熟期看護学実習概要：実習方法の変遷と成熟期の実習目標

1. 実習方法の変遷

図1で示すように、平成14年度から開始した成熟期看護学実習は平成15年度と16年度の2回改変を行っている。その主な目的は、臨地実習終了後の「実践と理

1) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学講座 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Collaboration Center, Gifu College of Nursing

論の統合」において成熟期看護学実習要項で示している
具体的目標を指針に、学生間で実習体験を共有し成熟
期にある人の健康課題と看護についての学びを深める
ことである。平成14年度と15年度は、各施設の実習
終了毎に実習パターン1と2のグループが別々に「実
践と理論の統合」を行っていたが、平成16年度からは
全グループが臨地実習終了後の「実践と理論の統合」で
2日半のグループワークと最終日半日かけた発表を行い、
学びの共有を図っている。

2. 成熟期の実習目標

具体的目標1<共通目標>

成熟期にある人々とその家族の健康生活を理解し、看

護の役割を学ぶ

具体的目標2<健康課題別目標>

- A. 健康の維持・増進のための生活を確立する成熟期
の人とその家族の看護
- B. 健康の回復過程にある成熟期の人とその家族の看
護
- C. 生活の再編成が必要な健康障害をもつ成熟期の人
とその家族の看護
- D. 生活の再構築が必要な健康障害をもつ成熟期の人
とその家族の看護
- E. 人生の終末を迎える（迎えている）成熟期の人と
その家族の看護

年度	実習パターン	実習内容																																		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
平成14年度	1	実践と理論の統合1					事業所	一般病院:14日間												実践と理論の統合2-1			高齢者ケア施設:10日間										実践と理論の統合2-2			
	2							高齢者ケア施設:10日										実践と理論の統合2-1			事業所	一般病院:14日														
平成15年度	1	実践と理論の統合1					実践と理論の統合	一般病院:12日間												実践と理論の統合2-1		高齢者ケア施設:12日										実践と理論の統合2-2				
	2							高齢者ケア施設12日													一般病院:12日															
平成16年度以降	1	実践と理論の統合1			事業所等		実践と理論の統合	一般病院:11日間												実践と理論の統合2-1	高齢者ケア施設:11日間										実践と理論の統合2-2					
	2	実践と理論の統合1						事業所等		高齢者ケア施設:11日間												一般病院:11日間														

注1) 病院での実習は、＜特殊な環境下で治療を受ける人とその家族への看護(手術室での看護)1日＞、＜社会生活を営みながら外来診療を利用している人とその家族への看護(外来または透析室での看護)1日＞を含む。

注2) 高齢者ケア施設での実習は、＜デイケア・デイサービスを利用している人とその家族への看護1日＞を含む。

注3) 平成16年度以降の「事業所等」の実習は、＜事業所1日＞と＜健診センターもしくは産業保健推進センターで1日＞で構成されている。

図1 成熟期看護学実習の変遷

なお、健康課題別目標 A は「健康の維持・増進ための生活を確立する」ことが課題となるため、成熟期の実習では主に「労働の場における看護実習」の中で、健康の維持・増進に向けた看護が学べるよう位置づけている。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

本研究の対象は、平成 14 年～平成 17 年度に教員が作成した「成熟期看護学実習受け持ち一覧表」の一般病院に関連した項目に記載された内容および、平成 16 年度手術室実習の学生の記録に記載された「受け持ち対象の情報」の内容である。

2. データ収集方法

「成熟期実習学生受け持ち一覧表」より、学生が受け持った対象の①性別、②年齢、③実習病棟の特徴、④健康課題別目標、⑤学生が透析室と外来のどちらで実習したか、⑥病棟での受け持ちと手術室実習の受け持ちの関係、以上 6 項目をデータとした。

なお、平成 16 年度については講座として「成熟期看護学実習受け持ち一覧表」の作成がなされなかったため、項目①～⑤のデータを得ることができなかった。また、項目⑥は平成 17 年度より「成熟期看護学実習受け持ち一覧表」に加えられたため、平成 16 年度については筆者が学生の記録よりデータ収集を行なった。

3. 分析方法

項目①～⑤について、年度毎の学生数を算出した。なお、項目④の健康課題別目標 A は主に「労働の場における看護実習」において学ぶため、一般病院での対象者はいないことが明確であるので、健康課題別目標 B～E の人数を算出した。また、項目⑥については、病棟における学生の受け持ちと手術室での受け持ちの一致状況を人数と割合で算出した。その際、内科系病棟の実習では、病棟の学生受け持ちと手術室の受け持ちは一致しないことが明らかなため、外科系病棟で実習している学生のみを対象とした。

4. 倫理的配慮

実習を担当した教員に「成熟期実習学生受け持ち一覧表」を研究に用いることを、説明し、了解を得た。また、平成 16 年度については、学生に文書および口頭で研究目的のために実習記録を用いることと、プライバシー保

護および協力の可否によって成績等に不利益を被らない旨を説明し同意書の提出を求め、対象となった 63 名より了承を得た。

Ⅳ. 結果

1. 性別

3 年間の男女別人数は 30～40 人代を推移しており、一方への顕著な偏りは認められなかった（表 1）。

2. 年齢

年度毎に最も人数の多かった年齢階級を見てみると、平成 14 年度と平成 17 年度は 60～70 歳代と 70～80 歳代、平成 15 年度は 70～80 歳代であった。さらに、60 歳以上の人数を合計すると、各年度ともに 50 人を超えており、一般病院においても高齢者を受け持つ学生が多いことが明らかになった。また、各年度の対象者平均年齢は、平成 14 年度 66.6 歳（SD=±1.4）、平成 15 年度 65.0 歳（SD=±1.4）、平成 17 年度 63.3 歳（SD=±1.8）であった（表 2）。

3. 実習病棟の特徴

一般病院の実習は 5 施設で実施している。平成 14～15 年度は内科系 2 施設、外科系 3 施設であったため外科系で実習している学生が内科系の 2 倍であったが、平成 17 年度は内科系が 1 施設となったため、外科系 62 名に対し内科系 14 名という結果であった（表 3）。

4. 透析室または外来における人数

平成 14～15 年度は透析室 2 施設、外来 3 施設で実習をしており、透析室と外来での実習人数はほぼ同数であった。平成 17 年度は施設変更にもなって外来での実習が増えたため、外来の人数が透析室の約 2 倍となった（表 4）。

5. 健康課題別目標

3 年間を通じて「健康課題別目標 B」が最も多く、半数以上を占めていた。健康課題別目標 C は平成 14 年度 22 名、平成 15 年度 18 名でほぼ 4 分の 1 であったが、平成 17 年度が 2 名となっている。一方 2 つの健康課題別目標を組み合わせると学んだ人数を見てみると、平成 17 年度は B と C の組み合わせが 14 名、C と E が 1 名で、15 名の学生が組み合わせの中で健康課題別目標 C を学んでいた（表 5）。

また、健康課題別目標 B～E の受け持ち対象者の特

表1 受け持ち対象者性別人数

	平成14年度 (n=77)	平成15年度 (n=76)	平成17年度 (n=76)
男 性	43	36	35
女 性	34	40	41

表2 年齢別受け持ち対象者人数

対象者年齢	平成14年度 (n=77)	平成15年度 (n=76)	平成17年度 (n=76)
20歳未満	0	0	2
20～30歳未満	1	0	1
30～40歳未満	2	4	3
40～50歳未満	2	1	7
50～60歳未満	20	12	11
60～70歳未満	22	21	22
70～80歳未満	22	28	22
80歳以上	8	10	8

表3 病棟の特徴別学生数

実習病棟の特徴	学 生 数		
	平成14年度 (n=77)	平成15年度 (n=76)	平成17年度 (n=76)
内科系	26	25	14
外科系	51	51	62

徴や受け持ち期間の具体例としては、Bはがんで手術療法を受ける患者の術前から術後急性期の期間、Cはストマ造設術などを受けた患者の術後急性期を脱した時期から退院までの期間、Dはくも膜下出血で脳動脈クリッピング術を受けたが麻痺が残る患者の急性期を脱した時期から、Eは肺がんの脳転移によって再入院している患者、等であった。

6. 病棟受け持ちの手術室受け持ち一致状況

各年度とも病棟での学生の受け持ちと手術室での受け持ちが一致している場合と一致していない場合の人数はほぼ半々であった(表6)。

V. 考察

1. 受け持ち対象者の年齢層について

成熟期看護学実習では、主に高齢者ケア施設の実習において老年期にある人たちへの看護を学ぶため、一般病院では可能な限り青年期から壮年期の人たちへの看護が学べるよう位置づけている。しかし今回の結果から50人以上の学生が60歳以上の人たちを受け持っていることが明らかになった。

表4 透析室と外来別実習学生数

実習病棟の特徴	学 生 数		
	平成14年度 (n=77)	平成15年度 (n=76)	平成17年度 (n=76)
透析室	38	39	27
外来	39	37	49

表5 健康課題別目標の受け持ち対象者人数

健康課題	平成14年度 (n=77)	平成15年度 (n=76)	平成17年度 (n=76)
A	0	0	0
B	47	42	39
C	22	18	2
D	5	6	6
E	3	6	5
B-C	0	0	14
B-D	0	0	7
B-E	0	1	2
C-E	0	1	1
D-E	0	2	0

表6 病棟受け持ちと手術室受け持ち対象者一致人数
(対象：外科系病棟実習生)

	平成16年度 (n=63)	平成17年度 (n=61)
一致している	28 (44.4%)	30 (49.2%)
一致していない	35 (55.6%)	31 (50.8%)

注) 平成17年度は学生62名中1名については記載が無く不明のため、61名を対象として算出した。

入院受療率の全国的な傾向を見てみると、65歳前後から顕著な増加が見られ、年齢階級が進むにつれて急激に入院受療率が高くなっている¹⁾。今回の結果は、前述した傾向が実習受け持ち対象者の年齢に影響をしているためと考えられる。こうした現実を踏まえ、成熟期という幅広いライフサイクルにある人たちの看護を学ぶために、教員は可能な限り青壮年期にある人たちを受け持つことができるよう意識して対象選定をする必要がある。

一方、成熟期看護学実習では平成16年度の実習方法改変の際に、青壮年層の労働者が対象となる事業所実習に健診センターの実習を取り入れており、改変以前に比べ青壮年期の健康課題を学ぶ機会が得られていると考える。こうした状況も踏まえ、今後は更に「労働の場での看護」と関連させながら、青壮年の健康課題を意識した成熟期看護学実習としての統合を行なう必要がある。

2. 健康課題別目標について

健康課題別目標では「B. 健康の回復過程にある成

「成熟期の人とその家族の看護」を学んだ学生が最も多かった。この背景には、外科系病棟で実習する学生が多いことと、手術室実習を1日課していることから、教員が意識的に実習期間中に手術療法を受ける患者を受け持てるよう対象選定していることが影響していると考えられる。

健康課題別目標Bの対象者を受け持った学生の学びの報告では²⁾、「社会的・家庭的問題の相談・調整」や「自己管理への援助」といった学びが少なく、健康課題別目標C、D、Eの対象を受け持った学生との学びの共有の必要性が指摘されている。また、筆者は「実践と理論の統合」のグループワークに参加し、学生の体験が少ない健康課題別目標については意見交換が十分に行なえずグループワークが効果的に展開し難いという印象を受けている。こうしたことから、学生が臨地実習で可能な限り多様な健康課題を持つ対象を受け持ちグループワークに臨むことが、学生の学びを深めることにつながると考える。しかし、実習施設として外科系病棟が多い状況や1日の手術室実習を課していることから、健康課題別目標B以外を受け持つ学生が制限される傾向にあるのが現状である。また、2週間とという実習期間中に健康課題別目標C、D、Eの対象を受け持つ学生を増やすためには、病棟での学生受け持ちとは別に手術室実習のために新たに受け持ちを依頼する機会が増える。このことは、緊張とストレスが非常に高い術前の時期に、患者・家族に対して手術見学のための承諾を得る機会が増えることに繋がる。以上のような現実を踏まえ、今後健康課題別目標B～Eを考慮に入れ病棟での学生の受け持ちをどのように選定していくか、講座全体で検討していく必要がある。

一方、学生のレポート分析による成熟期の目標達成状況の報告³⁾で、5つの健康課題別目標に共通して「保健・医療・福祉の活用の援助」についての学びが少なく、この理由として病棟実習では学生が目の前の問題・課題への対応に必死になり、援助を短期的に捉える傾向が影響していると指摘している。これに対し、透析室の実習では看護の役割として「保健・医療・福祉の有機的な連携」を学び得ていることが報告されている^{4, 5)}。以上より、成熟期看護学実習の学びを深めるために、病棟での実習と外来・透析室での実習をどう有機的につなげ、統合していくかを検討することが重要である。

VI. まとめ

一般病院における学生の受け持ち対象の特性から、成熟期看護学実習の課題を検討した。その結果、特に高齢者を受け持つ学生が多いこと、健康課題別目標ではBの対象を受け持つ学生が多いことが明らかになった。高齢者を受け持つ学生が多いことについては、全国的な高齢者の入院受療率増加が影響していること、健康課題別目標に偏りが生じていることについては、実習病棟の特徴や手術室実習を課していることが影響していることが考えられた。

今後はこうした現状を踏まえ、対象の選定については可能な限り青壮年期にある人たちを受け持てるよう教員が意識することや、健康課題別目標B～Eを考慮し学生の受け持ちをどのように選定していくか講座全体で検討していく必要がある。また、「実践と理論の統合」において、「労働の場での看護」や外来・透析室実習での学びをどのように有機的につなげるかを検討していくことが重要である。さらに、今回に明らかになった年齢や健康課題別目標の偏りが学生の学びにどう影響しているかを明確にし、成熟期看護学実習の充実に向け継続して検討する必要があると考える。

なお、本研究は、第16回日本看護教育学会学術集会に発表したものに加筆・修正したものである。

謝辞

本研究の趣旨を理解しご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

文献

- 1) 財団法人厚生統計協会：国民衛生の動向 2006年, 53(9)；72, 2006.
- 2) 奥村美奈子, 小野幸子, 兼松恵子, 他；成熟期看護学実習における学生の学び：第1報, 岐阜県立看護大学紀要, 4(1)；112-118, 2004.
- 3) 古川直美, 奥村美奈子, 兼松恵子, 他；成熟期看護学実習における学生の目標達成状況：日本看護教育学会誌, 14；168, 2004.
- 4) 小田和美, 田中克子, 北村直子, 他；成熟期看護学実習の外来において学生がとらえた「看護」一目標達成像から

みた実習方法の課題と方向性－：岐阜県立看護大学紀要，
3(1)；95-101，2003．

- 5) 田中克子，梅津美香，小田和美，他；成熟期看護学実習の
外来実習と透析室実習でとらえた「看護」の比較，岐阜県
立看護大学紀要，4(1)；133-139，2004．

(受稿日 平成18年12月6日)

(採用日 平成19年1月18日)